昭和六十三年十二月二十八日第三種郵便物認可
平成三十年七月一日発行（毎月一回一日発行）第三六四号

諷詠

七　月　号

花鳥諷詠　　7月号（364号）　日本伝統俳句協会

花鳥諷詠

平成30年７月■第364号 ――― 目 次

花鳥諷詠選集 …… 安原　葉 …… 2
千原　叡子 …… 4

第十五回国際俳句シンポジウム …… 7

この人の作品 …… 山本ふぢな ……15

一頁の鑑賞 …… 伊藤とほ歩 ……16
渡辺　光子 ……17

虚子の安心の世界 …… 瀬在　光本 ……18

賛助会員だより ……24

卯浪 ……26

地区行事開催日程表 ……31
編集後記 ……32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

●安原　葉選

特選五句

火の匂ひ残る末黒の草千里　唐津　平野杜星

憚りもなく朝寝してふと淋し　羽生　寺井芳子

蝌蚪生れて沼の広さをまだ知らず　山口　徳田千鶴

春宵や明日は任地に赴く子　福山　世良正子

惜春の雨のひと日となりにけり　熊本　渡邊佳代子

二句短評

一句目――熊本県阿蘇山の中央火口丘の一つ烏帽子岳北斜面の火口跡といわれる直径約一キロメートルの浅い窪地である「草千里」の早春の野焼が行われたあとの末黒の情景の句。その焼野に踏み入った作者には、火の匂いがまだ残っているように感じられたという。草千里の広い末黒野の情景と雰囲気が読む側にもよく伝わってくる。

二句目――心地よい春の朝寝から覚めてしばらく経ったあと、心をよぎった気持ちを素直に叙した句。その心情から、作者の生活や環境がいろいろ想像されて余韻が深い。

入選六十句

のどけしやときをり山羊の鳴く授業　大分　野村香代子

木の芽風青空を掃く大欅　金沢　中村曜子

桐の花此処を曲がれば母校かな　大牟田　猿渡章子

喪籠りを気遣ふ友のゐて温し　岡山　西崎公子

母一人住まふ山家の目貼剥ぐ　石川　宮下末子

卒業や鬼の教師の眼に泪　神戸　片岡橙更

飯蛸を肴に蜑の朝の酒　島原　三好勝利

花冷を解く再会の笑顔かな　高知　和田和子

見下ろしてこその眼福花の雲　高松　谷澤正子

迷ひ解くための検診春寒し　白岡　小林カヨ子

うららかや化石のごとく眠る亀　福山　広川良子

野遊や駆け寄りし子の日の匂ひ　浜田　田中由紀子

猪に種芋までも掘られけり　埼玉　新井あい子

いささかの酒にも酔ひて春の月　南砺　有川寛

蓮如忌や畏みて聞く一代記　金沢　三島由紀子

この辺りまでは人住み山笑ふ　高知　掛川　敬子
嘘と言へば淋し気な君四月馬鹿　名古屋　淺井ひと詩
お互ひに加齢いたはる春の風邪　長岡　桑原たかよし
花月夜歩きたくなる今宵かな　香川　中村　文子
キャンパスの青春謳歌花吹雪　堺　徳澤　彰子
嫁ぐ娘と別れ惜しみつ雛納む　神戸　松下美年子
檜また花粉を飛ばし山笑ふ　豊後高田　木村　和人
木の声を聴きつ剪定してをりぬ　小樽　山下　節子
虚子生れし日を知ることも実朝忌　松江　小村　四温
何気ない言葉かけられあたたかし　羽生　樋口レイ子
径尽きしところに沼や落椿　君津　榎本　静江
茶碗酒干して祭の若い衆　高山　原田　尚子
屋根替や結の絆は今もなほ　東京　吉里ひとみ
光りつつ騒立つ春の波頭　輪島　向　佐ち子
山笑ふお齢ですよと云ふ診立て　坂井　奥　清女

ただ一人待つドアマンの春寒し　芦屋　長安　悦子
御遺影はいつもにこやか虚子忌日　郡上　本田　節子
湖広し点点点と残る鴨　安中　多胡恵美子
養生を忘れて花へ歩を伸ばす　名古屋　原　有季
故郷の島をかくして黄砂降る　高松　中浦　霞
憧れの教授のもとへ入学す　福山　貝原　玲子
落人の隠れ里とや花こぶし　神戸　豊辺　靖子
由布越えの花の絵巻に迷ひ込む　宇佐　尾﨑　陽子
海峡の渦を眼下に鳥帰る　高松　静川あさえ
何もかも一斉に咲き春闌くる　兵庫　今地千鶴子
動く餌に助太刀ほしき雀の子　東京　大和田博道
ライト消え万朶の花の眠る闇　伊賀　北村　みち
妖しさを深めて夜の花の黙　東京　安出　文子
囀の降るや良寛禅師像　長岡　内籐　孝
少しづつ日の移りゆく春障子　太宰府　川路　泰子

集まれば花冷払ふ笑ひあり　姫路　英賀美千代
春泥や杖と長靴備ふ園　長岡　今井　芳子
長かりし仮設暮しや水温む　西宮　宮本　露子
竹林を抜ければ京の花の寺　神戸　石角　節子
湖の景動かして糸柳　福知山　宮本美恵子
一本の園に輝く朝ざくら　岡山　高木ひろゆき
熔岩の間に白き花咲く暮春かな　鹿児島　松尾あやめ
被災地の帰還は遠く鳥雲に　大分　平　英子
花便り聞きつつ吾は病床に　白山　水上　栄
一筋の足跡けさの淡雪に　根室　坂本　知子
新たなる友の加はり句座うらら　金沢　西田さい雪
車椅子共に連れ発つ花日和　宇佐　武石登美子
ふるさとの白魚便り聞くにつけ　由布　立川さよ子
もう居ない夫の追憶春の闇　高崎　並木　秋野
花冷の灯ともし頃やお濠端　宇部　西村しげみ

●千原叡子 選

特選五句

長かりし仮設暮しや水温む　西宮　宮本　露子
うららかやインコの話す京言葉　八尾　淺井　祥多
顔よりも大きなあくびせし子猫　高知　西込　とき
昨日とは違ふ律律しさ入学児　金沢　石名坂　房枝
大朝寝してからつぽの思考力　習志野　大慈弥　爽子

二句短評

一句目――阪神淡路の、或いは東北地方の地震か津波の被災後を詠まれた句であろうか。大切な命の水も怖ろしいのも水。過去形で言えるようになった仮設住居での哀しみ辛さを「水温む」の季題に託した佳句。

二句目――茶房でもあろうか「おこしやす。」と甲高く愛想の良いインコの声。京美人の京言葉を真似て又一声。南国から来て京言葉で飼われて何年になるのか。定連客も京訛で。季題の本意がよく活かされた一句。

入選六十句

嵯峨野より御室へ開く春日傘　七尾　本谷眞治郎

母一人住まふ山家の目貼剥ぐ　石川　宮下　末子

鎌倉へ夜汽車をつなぐ虚子忌かな　香川　福家　市子

東京に富士の見ゆる日卒業す　浜松　大庭よりえ

囀に余り有る空ありにけり　津山　池田　純子

一門の矜恃に修す虚子忌かな　高松　織田　雅子

惜春の植ゑ替へすすむ花時計　名古屋　内籐　信子

菖蒲の芽沼物語始まりぬ　高松　村川喜久子

春雷を遠ざけ碧し能登の海　仙台　加賀谷蕉雨

野遊や駆け寄りし子の日の匂ひ　浜田　田中由紀子

ペン先へおよぶ余寒のありにけり　平川　丹野　慶子

揺らしては花の心に触るる風　熊本　児玉　胡餅

一水も一碑も史蹟風光る　筑紫野　宮田　良子

噴火して笑はぬ山となりにけり　廿日市　齋藤　金二

大掃除済みて天井高き夜　高崎　藤巻　淳子

倒木に迂回余儀なし春の山　金沢　瀬古　祥子

白地著て幸せさうと言はれたる　松原　加藤　あや

選り惑ふ新種目を引く種袋　白山　鈴木　恵子

湾処には新たな命春の水　神戸　上岡あきら

光りつつ騒立つ春の波頭　輪島　向　佐ち子

花吹雪風を大きく見せてをり　姫路　上原　康子

初蝶の喜色あふれし翅光る　福岡　村山阿佐美

蝶を追ふ子を追ふ母も蝶を追ふ　大津　伊藤　薫

寂光を秘めし真白き椿かな　香川　柴田　禮美

椿寿忌や息ととのへて寺領へと　千葉　鈴木真沙枝

一片の光となりて初蝶来　市原　飯塚　咲子

妹の忌を漸く修しあたたかし　敦賀　山口やすか

椿寿忌や別れと出合ひ今日一日　江津　大前とも子

真つ新な鳥居にこぼれたる初音　熊本　宗像　和子

春雷といふ明るさを運ぶもの　野々市　中村　珠栄

花屑の埋めてをりぬ潦　鳥取　西尾　青雨

良き知らせ四月馬鹿かと疑ひぬ　河内長野　祝　澤子

薄墨の花や支柱も景として　石川　駒形　隼男

車椅子ヨイショヨイショと花の坂　糸島　青木よしえ

ライト消え万朶の花の眠る闇　伊賀　北村　みち

春愁のなぐさめられてなほ深く　岩倉　村瀬みさを

あれこれと買ひたくなりし花の種　郡上　谷口　恒子

大気突く空手の腕寒稽古　広島　濵本伊勢代

時ならぬ雪にたぢろぐ鯉幟　北海道　竹田千恵子

母に無き齢を生きて若葉風　鹿児島　上間喜久子

生真面目な夫に無縁や万愚節　横浜　村田まち子

憚りもなく朝寝してふと淋し　羽生　寺井　芳子

青空の奥へ奥へと揚雲雀　鳥取　椋　則子

入園の子の大つむりチューリップ　鳥取　椋　誠一朗

花人の吸ひ込まれゆく段葛　富津　平野　都

春愁をきつぱりすてに野に出づる　鹿児島　松尾　好就

断崖を空へ一気に燕飛ぶ　松江　山根　正巳

土筆摘む妻に童顔もどりゐし　秋田　岩谷　塵外

飛魚の真青なる空恋うてとぶ　島原　原　典子

囀や恋となりゆく枝移り　秩父　墓　きくえ

野も山も光の中に萌え出す　福山　今野　真

入学児今日一日の王子様　神戸　岸本とし雄

散るものに咲き継ぐものに夏近し　名古屋　服部　要子

星おぼろ峡の水音醒めてをり　町田　村井田貞子

もう使ふことなき鉄路陽炎へる　東京　岡田　圭子

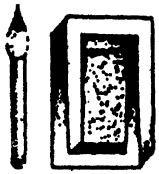
砂出しに一と夜つぶやく浅蜊貝　丹波　横川　弘子

無住寺の庭紅椿白椿　東京　大石つぎえ

亀鳴くや女人禁制なるところ　福山　小林　加悦

若鮎の水になりきりさばしれる　諫早　吉岡　乱水

嬰児の抱き手数多や桃の花　川西　大西　水芳



編集後記

青簾世に隠れんとには非ず　　虚子

昭和三十一年七月一日

俳人といえば、特別な存在であると自負し、社会全般・公共マスコミ等に現れる事象を悉く軽蔑する向きがあるが、必ずしもそうだという時代でもなかろう。この句も、「銀行協会」でのもので、虚子はそれを意識してか、世の中と対峙する気構えさえ見せている。

「公告」

去る六月十日の第三十一回通常総会が滞りなく終了いたしました。

議案等につきましても、本誌に掲載されました通りすべての議案が全員一致の賛同をいただき、採決されましたことをここにご報告申し上げます。

審議内容につきましては、四月号等をご覧下さい。

また、審議事案ではなく報告事案ですが、新たに「青年部」の発足の提案をいたしました。これは、協会の五十歳未満の会員の参加を前提としたもので、今後もその趣旨にそって新会員の獲得、句会・研修会などの開催を目指すものです。

本誌にも追々その関連記事を掲載する予定ですので、ご検討の上ご意見等をお待ちしております。

来たる全国俳句大会（四国支部主管・松山市）の投句締め切りは七月十七日までとなります。まだまだ間に合いますので、お忘れの方もどしどしご応募をお待ちしております。協会会員以外の方の御投句も受け付けておりますので、まわりの方にもぜひお誘いください。

なお大会当日のご参加も併せてよろしくお願い申し上げます。　（俊樹）

花鳥諷詠 七月号（通巻第三六四号）
定価一五〇円　但し、本代は年会費に含む
年会費 一〇、〇〇〇円
平成三十年七月一日
発行人　稲畑汀子
発行所　〒151-0073　東京都渋谷区笹塚二-一八-九　シャンブル笹塚二-B一〇一
公益社団法人 日本伝統俳句協会
電話　〇三-三四五四-五一九一
郵便振替　口座番号　〇〇一六〇-七-一八六八二〇
印刷所　日本ハイコム㈱　〒112-0014　東京都文京区関口一-一九-二